
誘う鈴

梶浦絶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘う鈴

【Nコード】

N7702Y

【作者名】

梶浦絶

【あらすじ】

疲れていたラフィは鈴の音を聞く。

あの音との出会い

疲れているので空耳が聞こえたのかと思った。

チリン、と控えめに鳴って、それだけで終った。

知らない部屋だったが息苦しさには耐えられず、窓を開けようとした。

窓辺に立ち寄ったところでまた聞いた。

チリン、チリンと。二度。

戻ってくるとまるで夢から覚めた気分だった。

ラフィは灰色の宙に浮いたキューブの家に住んでいる。

奥行きが三メートル、横が二メートルと狭い。扉から一番は離れた位置にそつけない窓がある。

正方形で、縦二メートル横二メートルの壁の中央をくり抜いている窓。

窓は大きい。

いつそのこと壁一面を窓にすれば良かったのに、と思うほど。

そしてその窓は開けることが出来ない。

キューブから五メートルも離れていない場所を列車が走っているからだ。

空気が悪く、騒音も激しい。

ラフィは外出するときにはいつもイヤホンを付ける。

耳を塞いで音楽を聴いく。そのほうが騒音を聞くより耳に優しいからだ。

黄金色の鳥、ミルル（前書き）

隣人アキトとラフィの会話の最中、鳥のミルルが迎えに来る。

黄金色の鳥、ミルル

家のドアを開け、外に出る。

俯いていたラフィは気がつかなかった。左隣の住人が同じタイミングでドアを開けたことに。

耳にはイヤホンをつけている。音も聞こえない。

「ああ、あんた、目が金色じゃないか。よそ者か」

そう呼びかけたのは腰まで届く黒髪を一つに結んだ男だった。ラフィと並ぶと二十センチほど背が高い。キューブに住むには不向きな鍛えられた体をしていた。

「……シカトかよ」

気がつかないラフィがイヤホンをしていることに気がついて、男は無造作にラフィに向かって手を伸ばし、イヤホンを取る。

そこで初めて外の轟音を聞いたラフィは、思わず耳を塞ぐ。

そしてさっき自分に向かって伸びた手の持ち主を見上げる。

透き通るような白い肌は病的にさえ見える。よそ者と言われる理由になった金色の目と、それを縁取る長い睫毛は不審げに男を見上げる。

そして不審は不安に変わる。

「………なんですか」

小さい声はかろうじて聞き取れるほどだった。男はラフィを少女かと思った。背丈は百六十ほど、痩せていて、よそ者らしく抜群に抜きん出た美しさだ。

「挨拶だよ。俺はアキト、よろしく。あんたは？」

アキトはここに来てひと月になるが、薄いキューブの壁から隣の物音が一切聞こえてこないのが人が住んでいないと思っていたのだ。思いがけず隣人を発見して、つい声をかけた。

しかし、何ですか、と問われても答えようがなかったので、つい『挨拶』と言った。

「僕は、ラフィ」

「僕？」

「男ですよ」

よく女と間違えられるラフィは淡々と答えた。そして時計を見る。今日はやつと雇われたアルバイトの二日目で、まさか遅刻するわけにもいかなかった。

「すみません、急ぐんで」

「急ぐなら送ろうか？ 俺のミルルは速いぞ」

「間に合うので大丈夫です」

アキトの言葉が終る前にかぶせるようにして、ラフィは断る。

今日初めて会った人に送ってもらう理由なんてなかった。

大体嫌いなのだ、人と接することが。

「あ、そう」

気にする風ではなく、アキトは答える。そして胸元から細い銀の鎖を引っ張り出す。

その先にはマツチ棒くらいの大きさの笛がぶら下がっている。

思わず興味を持って、ラフィはそれをじっと見る。

キューブは宙に浮いているので、風も強い。

自然の風と、列車や飛行機が通るたびに吹き付けられる風と。慣れてしまえばそれまでだった。

アキトが皮ひもで結んでいる黒髪が風に流れる様子を、ラフィは見つめる。

さらさらと指どおりが良さそうで、触ってみたい。

ラフィは自分の肩に付かない程度 of 金髪になんともなく触れる。

紛らわしいから切ったのに、今日も女の子に間違われてしまった。

「寝てるからさ、鳥笛で来なかったりするんだ」

笑ってラフィを見てから、笛を吹く。

気になってじっとこちらを見ている様子は、少女に見えようが少年に見えようが幼い子供そのもので単純に可愛らしかった。

前方からバサッバサッという音と共に黄金色の羽の鳥が近づいて

くる。

その姿はみるみる大きくなり、ぶつかる、と思わずラフィは身をすくめ後ろに下がる。

「起きてるわよ！ 起きてあんたがそっちの女の子をナンパしているところから、ずっと聞いてたわ！」

「おい、誤解だよ。ナンパじゃないし女の子じゃないんだよ」

「私、気を使って散歩してたの。でもいい加減嫌になっちゃう。アキトはついに幼い男の子にまで手を出すようになったのね・・・」

「ミルル、勘弁してくれよ、あ、ラフィ。誤解だから。この鳥の誤解だからな」

ラフィは暫く全長三メートルはありそうな鳥の顔を見ていたが、話の内容からそつとアキトから離れる。

「鳥って言わないで！」

「だって鳥だろ！？」

一人と一匹の言い争いを聞きながら、ラフィそつとその場を去る。
「ラフィ、信じるなよ！」

まるで古い仲のように遠ざかるラフィに声をかける。

ラフィは足早に立ち去りながら、ミルルと呼ばれた鳥の、黄金色の羽と瞳を思い出していた。

おそろいだ、と思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702y/>

誘う鈴

2011年11月24日09時45分発行